希学園　第339回　公開テスト　小５　国語　２０２０年８月２日実施【模範解答】制限時間40分

1

（３・６・８　各完答）

1 a 議題　b 業界　c 名目

2 自分の評価

3 A ウ　B エ　C ア

4 その場

5 エ

6 Ⅰ エ　Ⅱ イ

7 よくない

8 X 高〜会　Y 子〜料

9 頭のいい人

10 くる

11 ウ

2

（２・３　各完答）

1 a 建物　b 照明　c 案内　d 関心

2 A エ　B イ　C ア　D ウ

3 Ⅰ ア　Ⅱ イ

4 まわりでは

5 ビー玉

6 ウ

7 チリン

8 ア

9 （記述題）

10 ア

11 色

12 イ

2

9

物事の「節目」にあたってのの儀式のようなものがないことに対して安心する気持ち。

（同意可）

配点

1 1 2 1	各２点×　７＝１４点
2 9	６点
その他	各４点×２０＝８０点
	１００点

希学園　第339回　公開テスト　小５　国語　２０２０年８月２日実施【解説】

［1］

1　ａ「議題」の「議」は「義」にしてしまうという間違いをしないこと。また、右側の形もよく間違えるので注意しよう。ｂ「業界」の「業」の上の部分は真ん中の二本をまっすぐに書くこと。ｃ「名目」とはこの場合、「表向きの理由・目的」を指す。ことばをしっかり覚えよう。

2　設問に用意された文に注目してほしい。本文十五行目に「日常的に自分の評価を落とし続けている」という似たような表現がある。

3　（　Ａ　）は直後に「重ねて」とあるので、添加を表す「さらに」が入る。（　Ｂ　）は直前の段落との対比で「だが」が入る。（　Ｃ　）は「そもそも三段論法」の具体例が書かれるところなので「たとえば」が入る。

4　本文最後の段落で挙げられている人は、本文四行目に書いてあることと似たことをしている。この関連から、――線②に書いてあったことを最後の段落で「その場しのぎ」と言いかえたと結びつけることができる。

5　問われているのは「似たようなこと」自体ではない。したがってウは外せる。後を読めば「似たようなこと」＝「小論文でも『なんとなく』と答えること」だとわかるので、それはどのようなことに似ているのかと考えるとエになる。

6　空らんの直後には「など、さまざまな根拠が考えられる」とあるので、それぞれ筆者の想定したしっかりした根拠が入るはずである。アは後の悪い例で出てくるものであるし、ウは個人の好みなのでよい根拠とは言えない。

7　直後の「堂々巡り」とは「同じところをぐるぐる回る」という意味なので、元の「よくないと思う」という答えに戻るのである。

8　「反対の立場」の例が本文中に示されているので、それを参考にする。［Ｘ］の後にある「に備えるべきだ」や、［Ｙ］の前にある「少子化にもかかわらず」ということばをヒントにしよう。

9　結局、主語を聞かれているのである。二つ前の文が「頭のいい人は」で始まっている。ここから「頭のいい人」についての話が始まっているのである。言わなくてもわかる主語は省略されるので、読む側はそれを正確につかまなければならない。ちなみに、――線⑥の直後の文では「根拠を聞かれて沈黙してしまう人は」と、新たな主語に変わっている。

10　「言いくるめる」とは「ことばたくみに言ってごまかす」「口先でまるめこむ」という意味である。新たに知ったことばである場合はしっかりと自分のものにしていこう。

11　アのような因果関係は示されていない。筆者はあくまで「そもそも三段論法」という方法を勧めているだけである。イは「不可欠」が言いすぎである。このような極端な表現は誤りの選択肢を作るための常套手段であるので、見逃さないこと。エは最後の打ち消しで意味が反対になっている。

［2］

1　ａ「建物」の「建」の右側の線の数、また「えんにょう」の形に注意しよう。ｂ「照明」は同音異義語「証明」などもあるので、しっかりとことばの意味をとらえ、イメージをした上で書くようにしよう。ｃ「案内」はことばとしても難しくはないので、確実に書けるようにしておきたい。ｄ「関心」は「感心」「寒心」などの同音異義語に注意すること。

2　擬態語の空らん補充問題。基本的に直後のことばにぴったりあてはまるイメージのものを入れていけば特に問題はない。できれば確実なものから入れていくとよいだろう。

3　適切な比喩表現を入れる問題。イメージ化が重要である。［Ⅰ］は「ゆるやかなウェーブ」で「さざ波」に決まる。［Ⅱ］は二つ目に注目すれば直後に「をつめたグラス」とあるのだから、「氷」と決まるだろう。「ガラスのわれる音」がしているのだから、この一輪挿しは当然ガラスでできているはずである。「ガラスのように」では比喩にならない。

4　「少年」が入ってきた瞬間のクラスの様子を見逃してはいけない。意味もなく「まわりではっと息をのむ気配がした」と書かれているのではないのである。常に「イメージ化」や「疑問を持って読むこと」を心がけよう。

5　――線④の直後に「少年はふと顔をあげ、黒いビー玉をあたしに向けた」というところがある。少年の目を「黒いビー玉」とたとえているのである。この言い方に注目すれば、［②］の時点ですでに言っていたということが推測できる。「黒い」にも注目しよう。

6　「あたし」は一輪挿しを初めて見たときに「目を奪われた」のであり、一輪挿しの色を見て「こんな色のビー玉がほしいな……」とも考えていた。それが何の前触れもなく、突然壊されたのだから、ショックを受けたのである。直後に「一輪挿しの悲鳴が耳について離れない」とあるのがその根拠である。アはおかしくはないが、この説明があるウにはおよばない。

7　この表現自体は「擬人法」である。「悲鳴」とあるのだから、実際に音として聞こえたものと考えるべきだろう。

8　この発言は「あたし」に向けられているので、「少年」が、「あたし」の心情を察して発言したことになる。どのようなことを察したのか、状況をふまえればア以外にはありえないだろう。「少年」が言った内容からもアだということがわかる。

9　まず、「そんな」という指示語が指しているのは直前の「それを好ましいと思った」というところである。この部分の「それ」という指示語をさらに明らかにしなければならない。それがさらに前の文の「物事の『節目』にあたっての儀式のようなものは、ここにはないらしい」という部分である。この二つの文を結合すれば答えになる。

10　イはまだこの時点では思っていない。ウはこの瞬間に思うことではない。エも、思うにしてももっと後の段階だろう。

11　「白いソファ」「赤いゼラニウム」「えりが水色のセーラー服」「白いカーネーション」「赤い一輪挿し」「唇からまっ赤な舌を出したプリントの白いＴシャツ」「黒いビー玉」「白い指」「銀色のダストボックス」「銀色の缶ペン」「白いワイシャツ」「黒いネクタイ」など、異様なほど色の描写がされている。ビー玉が好きなこととも関連するが、「あたし」が「色」を気にするところがあることを作者は表現したいのである。

12　問３はすべて比喩であるし、その後の「シャーベットみたいな」「黒いビー玉」など、比喩が多用されている。体言止めは九行目の「ガラス窓。」、（　Ｃ　）直後の「ガラスの塊。」、次の行の「黒い球。」、その五行後の「ガラスのわれる音。」、さらに六行後の「ボーイソプラノ。」などである。

以　上